



Title	＜紹介＞斎藤理生著『ごく短い小説の研究 近現代日本掌編文学論』
Author(s)	森本, 悠陽
Citation	語文. 2026, 126, p. 86-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106108
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

斎藤理生著

『ごく短い小説の研究 近現代日本掌編文学論』

森 本 悠 陽

本書は、従来の日本語近現代文学史の中で埋もれていた、四〇〇字から二〇〇〇字程度にも満たない「ごく短い小説」の意義を、一〇〇年という長大な期間から明らかにしたものである。

本書の特徴は、「ごく短い小説」が歴史的にとった様々な形態を、「掌編文学」という名称であえて平面的に扱う姿勢にあると言える。近現代に日本語で書かれた「ごく短い小説」は、「コント」「掌編小説」「壁小説」など、多種多様な名で流通していた。その一つ一つには固有のコンテクストが存在しており、それぞれに期待されていた役割も異なる。随筆や散文詩と判別のつかない作品もある。ただ、「ごく短い」という形式上、それらが緩やかに接続していることには違いない。そもそも、同時代からすでに、名称やジャンルが混淆して流通する状況も発生していた。ゆえに、本書は戦略的にそれらを「掌編文学」と総称し、フラットに扱うことに意義を見出す。それにより、従来別々の文脈で理解されていた、あるいは存在自体が知られることのなかった作品たちを、ゆるやかな共通性のもとで理解し、位置づける。

そうした視座にもとづいて、本書は、第一部「近現代日本の掌編文学——コントを中心に」において、まず日本語掌編文学史を

形作る。第一章「日本掌編文学史——一〇〇年の素描」は、一九二〇年代にフランスから輸入された「コント」から、二〇一〇年代に現れた『5分後に意外な結末』や「Twitter文学」までの流れを通史として概観する。その上で、第二章「コント」と「掌編小説」の発生——一九二〇年代中期」は、「掌編文学」の出発点と目される「コント」と「掌編小説」が流行となっていく過程を、作家の岡田三郎や雑誌「文芸時代」の動向を軸に詳らかにする。第三章「拡散するコント——一九三〇年代を中心に」は、「コント」流行の終焉と語られやすい一九三〇年代が、実際には「コント」をはじめとした「掌編文学」が社会全体に浸透していく時期であったという事実を、広範囲のメディアにおける「掌編文学」掲載状況から明らかにする。第四章「武野藤介論——コントの神様」の執筆活動」は、「コントの神様」を自称し当時名を馳せていたが、今では忘却された武野藤介の作家活動に着目し、掌編文学史の別的一幕を映し出す。また、コラム①「億良伸を探して——消えた「掌編小説」の原点」では、「掌編小説」という言葉の生成に関わりながら、正体不明であった億良伸の足跡も追い、掌編文学史に位置づけていく。

その上で、第二章「掌編文学とメディア——新聞から」では、第一部で描き出された掌編文学史から、特に「掌編文学」とメディアとの関係を掘り下げる。読み捨てられやすい新聞の特性上、これまで埋もれていた多くの新聞掲載作品に光を当てるとともに、新聞が「掌編文学」の社会への浸透に重要な役割を担っていたこ

とを示す。第一章「ニュース小説」という試み——『時事新報』と文学者」は、一九三〇年の『時事新報』上で試みられた、実際の事件を題材とする「ニュース小説」の様相とその意義を明らかにする。第二章「戦後の新興地方紙と掌編文学」は、敗戦直後に相次いで創刊された新興地方紙における「掌編文学」特集に着目し、それが疎開や復員により移動していた作家や編集者の思わぬ繋がりから結実したこと、またそれが戦後文学の一端として重要であったことを指摘する。続いて、第三章「戦後の全国紙と掌編文学——特集を中心に」は、敗戦後から五〇年代の全国紙（およびその地方版）における「掌編文学」特集に目を向け、「掌編文学」が人々の身近にあり続けていた事実を改めて確認する。また、コラム②「コントの終わりに——『日本経済新聞』『中部日本新聞』の特集」は第二部の補完として、その他の新聞での「掌編文学」特集に触れ、各々の特質を示している。

そして、第三部「掌編文学を読む」では、「掌編文学の書き手としてはマイナーな作家たちの作品を対象にして」（二一頁）、作品分析を実践している。本書は各作品に応じたアプローチを駆使し、その魅力を引き出す。第一章「太宰治『あさましきもの』——再帰的構造」では、作中人物および語り手の「あさましき」様子を際立たせる重層的な作品構造を明らかにし、更に作品を初出の雑誌『若草』に置き直すことで、既存の読みを更新する。第二章「織田作之助『実感』——掌編文学の生成」は、草稿類から作品の生成過程を再現し、情報の取捨選択あるいは凝縮によって「掌編文学」

が成立していく様子を浮き彫りにする。第三章「坂口安吾『復員』——凝縮された内面の劇」は、同時代の復員兵に関する言説を参照しながら、作中の復員兵が抱く一見不可解な内面を読み込む。第四章「杉山平一『お菓子』『軌道』——ジャンルの境界」は、詩人の杉山が手がけた作品について分析し、散文と詩との境界が曖昧になる特質と、それが許容される「掌編文学」の裾野の広さを示す。第五章「三島由紀夫『恋文』『日食』——被占領下のメディアのなかで」は、作中の「PX」や「日食」をめぐる同時代状況を踏まえ、社会批判を潜ませる作品の奥行きを顕在化させる。第六章「松本清張『過去の女』報告書——長篇への助走」は、複数の解釈を生起させる巧妙な作品構造を解き明かしながら、代表的長篇『ゼロの焦点』と作品との交差を見出す。第七章「村上春樹『こゝとわぎ』——言葉の手ざわり」は、同内容を繰り返す関西弁の語り、発話行為自体の悦楽を顕在化させることを指摘する。

このようにして、本書は、従来の文芸誌や単行本掲載の長・中・短編を中心とした日本語近現代文学史ではない新たな文学史を提供するとともに、「掌編文学」というジャンルの豊穡さや作品自体の魅力も十分に共有してくれる。「おわりに」で託された著者の願い通りに、間違いなく「この一冊が、掌編文学を楽しみ、あるいはより深く考察する糸口になる」（三八〇頁）は、必ずである。

（大阪大学出版会、二〇二五年一月、四二九頁、八、〇〇〇円＋税）

（もりもと・ゆうひ 本学大学院博士後期課程）